
夕日に天使の笑顔

みー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日に天使の笑顔

【Nコード】

N4826S

【作者名】

みー

【あらすじ】

偶然に会ったLA在住のとても綺麗な男の子。強引な申し出に、彼の日本旅行最終日を、亜紀が案内することになって…。

（前書き）

長いので、最後までお付き合いしていただけたら幸いです。

その朝私は母親に頼まれ、都心の有名なパン屋に買い物に来ていた。

高級ブランド店が立ち並び通りに店を構えるその店は、クロワッサンで有名なパン屋で、本店は海外にある。

毎日開店前に列をなす人たちの目的は、朝8時半の開店から売り出す限定20袋のクロワッサンだ。

私がパン屋に着く頃には既に19人が並んでいた。幸運なことにラスト一袋が手に入りそうであった。

それにしても、いい天気……
空を見上げると、雲一つない快晴で、太陽が惜しみなく降り注いでいる。

初夏の湿気を多く含んだ風が頬を通り、焼きたてのパンの匂いを運んでくる。

たまには早起きして、お母さんの頼みごと聞くのもいいかも。

その時、私の後ろに誰かが並んだ。

振り返ると息をのむほど綺麗な顔の男の子が立っていた。

日本人離れた顔立ちで、ハーフと言われても納得できるような。

彼が不思議そうに見返すので、見惚れていたことに気づき慌てて前を向く。

開店を告げるベルが鳴った。

先頭の人に続き、次々に人が店内に入って行く。そこで、私ははっとした。

きつと今並んだということは、彼もクロワッサンを買いに来たのだろ。

しかし人数的に私の後ろに並んだ彼は買えない。それを知らずに並んでいるのだとしたら……

ちらつと後ろを見た。

彼は私と目が合うと首をかしげて微笑んだ。

うわ……良心が痛む。

でも買えるのは私までだと言わなくては！

私は彼に向き直って、恐る恐る話しかけた。

「あの、もしクロワッサン買いたくて並んでるのなら、買えないと思うんです……」

彼は一瞬きよとしたがまた微笑んだ。そして、恐ろしく流暢な英語でこう言った。

「No problem」

いやいや！絶対通じてないでしょう！？

というか、日本語が分からない？

私は恥をしのんで、カタコト覚悟で言った。

「You can't buy クロワッサン、OK? Do you understand?」

無駄に大きな身ぶりで伝え切り、彼の反応を待つ。

彼はしばらく固まり、小さく口を開いてやっところ言った。

「why?」

ホワイ？それは20人限定で、あなたが並んでるのが21番目だからよ！

でもそれって英語で何て言うの？ どうしよう？

「お客様、お会計をお願いします」

店員さんにそう言われ、私ははっとしてレジ横のクロワッサンを掴んだ。

「あの、これ一袋」

彼はどうやら、クロワッサンの袋がなくなったことに気づいたよう

だ。

後ろから突き刺さる視線を感じる。いたたまれない……

私はお金を払うと、目を合わせないよう全力で立ち去ろうとした。しかし、出来なかった。

「待てよ」

彼は低い声でそう言って、しっかりと私の手首をつかんでいた。

「いや、すいません。でも20人限定ってルールなんで……」

必死で言い訳してさっさと逃げようとした私。はた、とあることに気がついた。

「あんた日本語喋れるんじゃない！」

何故こうなっているのか。

私は、普段なら絶対に入れないであろうセレブなカフェにいた。あの男の子と一緒に。

「日本語喋れるなら、なんでっ、何で言ってくれなかったんですか！」

「喋れないなんて言っただろ、一言も」

そう。彼は英語がペラペラな上、日本語にも全く問題がなかった。

「でも、ノープロブレムとか、ホワイとか……」

「日常語は英語だから、簡単な返事はい英語で返すの癖なんだ」

「だからって……私がんばって英語で話したのに！」

「良かったじゃん。下手な英語の練習になって。コーヒーでいい？」

下手な英語！？ 自覚はあるけど他人に言われる筋合いはない！ 気付いたけど、天使な顔してこいつ、すごく口の悪い奴だ。

「コーヒーいりませんから。帰ってもいいですか？」

クロワッサンも焼きたてのうちに帰りたいし……

「いいけど、それ置いていけよ」

それ、と指差すのは私のクロワッサンだ。

「嫌ですよ。私が買ったんですもん」

私が怪訝な顔してそう言っていると、盛大なため息をつかれた。

「いつでも買えるだろ。俺は旅行で日本に来ていて、今日帰国なの。譲れよ」

「は？ いや、これは私がお金払って買ったもので……」

「だからこうして代わりに美味しいコーヒーおごってるだろ？日本に住んでるならあんたはいつでも買えるよね。20人限定ルール知らなかった旅行者に、恵んでくれてもいいと思わない？」

なんて奴なの？

もう、しつこいし、これ以上相手をするのも疲れそう……
私は、クロワッサンの袋を開けるとそのうちの二つを彼の前に差し出した。

「はい。これでいいでしょ」

彼はちよつと驚いたようだったが、それを受け取ると微笑んだ。

「Thank you. you are kind!」

それはやっぱり、天使の微笑みだった。

ケチな私はせっかくだから彼の頼んだコーヒーを飲んでから帰ろうとそこに座った。

飲んだこともないほど美味しいコーヒーに感動し、すっかり気分がよくなった私は、彼に対する警戒も忘れ、お喋りに花を咲かせた。

「へえー！ LAに住んでいるの?！」

「そう。日本には7歳の時に一度来ただけで、これが二回目なんだ」
「じゃあどうして、そんな日本語が上手なの?」

「家では日本語を使っているんだ。母はあまり英語が流暢じゃないからね……」

飲食をしている姿を見て気付いたが、彼は口は悪いがとても育ちが良さそうだ。

一つ一つの仕草がとても上品で、こちらが恥ずかしくなる位であった。

「そういえば、名前は何て言うの？私は亜紀だよ！」

「俺は遥。向こうの名前は別にあるけど日本の名前は遥だよ」

「遥かー、素敵な名前ね！」

私がそう言つと、遥は堪えきれないといった感じで笑いだした。

「な、何よ」

「変なやつ。一回慣れたら質問攻め？ 人懐こいって、言われるだろ？」

おかしくてたまらない様子の遥。表情からしてきつと私はからかわれているのだろつ。

「よし、決めた！」

遥が伝票を持って立ち上がった。

「日本最後の一日は、亜紀と過ごすよ。俺を案内して」

…はい？

彼は、どこまでも人の都合を考えない人間だった。

「どつか「日本らしい」所に案内しろよ」

そのセリフだけを言うと、遥は後のことを全て私に丸投げした。とりあえず母親に、クロワッサンが持ち帰れない旨を連絡して、遥を浅草へ連れていくことに決めた。

祝日のためか、雷門前は午前中から賑わいを見せていた。

「oh！」

遥は出店の並びや初めて見る生の雷門に、欧米人らしく感嘆した。まるで小さな子供のように目を輝かせ、興味心身に一軒一軒店を覗いていく。

本来ならば今日初めて会った人の案内など引き受けない。いくら日本が治安のいい国だと言っても、物騒な人はいるものだ。

しかし遥のこんな楽しそうな様子や、見た目に合わず子供っぽい所を見ているうちに、なんだか放っておけないと感じた。そして今日は特に予定もなかったし、一日くらい彼につき合ってやるか、と思

ったのだ。

「亜紀！こっち来いよ！」

遥が手招きするので、私は駆け寄る。

「これ！これ何？」

「人形焼だよ！一つ頼んで、分けて食べようか？」

「おお、食べたい」

遥は高そうな財布を開いた。…そして顔をしかめた。

「亜紀、ドルしかないよ…。両替した円使っちゃったみたいで、もうない」

こういう所が、放っておけないのである。

夕方まで浅草周辺を堪能した私たちは、夜の遥がアメリカへ発つ便に合わせ、もう一か所行くことにした。

私は一か所、どうしても遥を連れていきたいとっておきの場所があったのだ。

空港へ向かう電車から見える景色はどんどん自然豊かなものになり、都心とは全く違う風景が流れていた。人混みの中を張りきって観光したせいか、遥は少し疲れた様子だった。

「遥、ここで降りよう」

私は遥を引っ張って途中下車をした。

「何で降りたの？まだ空港じゃないだろ……」

「いいから。ついて来て」

駅の改札を抜けて、緑豊かな風景の中道を歩いていく。

「いいところだなあ……空気がおいしい……」

遥は深呼吸したり、緑を眺めたり、最後の日本を存分に楽しんでいくようだ。

私は鉄橋の歩道へ彼を連れてきた。

「見て」

私の指さす先には、幅の広い澄んだ川に映った大きな丸い夕陽。この時間帯、川にくつきりと映る夕日はとても美しい。

昔祖母がこの辺に住んでいた。そして、私は毎度祖母にせがんでこの場所に連れてきてもらっていた。

「きれいでしょう……？」

遥は言葉を失って、その景色に浸っていた。

やさしい風が私たちの髪を、辺りの緑を揺らして去っていく。

「亜紀」

遥が景色を見たまま私の名を呼んだ。

「実は俺、ここへ来るのは二回目なんだ」

私は驚いて目を見開いた。

「俺が一度、日本へ来たことがあるって言ったよな。その時に、一回ここへ来た」

私は頭に何か引っかかるものを感じた。遠い記憶の中に、この場所での懐かしい思い出が…

「君に連れられてきたんだ」

そう言われて、思い出したのは10年前のこと。

ちびで泣き虫だった遥。空港へ向かう電車の途中で、両親と小さなケンカをして電車を飛び出した。

気づけば知らない駅の、知らない風景。改札を出たはいいが何も持っておらず、途方に暮れて泣きだした。

そこに通りかかったのは、同い年の女の子。

10年前、7歳の亜紀。

亜紀は泣き続ける遥を慰めるために、近場のこの場所へ連れてきた。川に落ちた夕焼けを見た遥はあつという間に泣きやんだ。そして広がったのは、天使のような笑顔だった。

その後、遥は何度も何度も思い出した。

幼い日にとっておきの場所へ連れて行ってくれた女の子。励ますように握ってくれた小さな手。夕日の景色。

元気にしているだろうか？

彼女は今、どうしているのだろうか？

やがてその気持ちは「会いたい」に変わっていった。

亜紀の母親と連絡が取れるようになるまで、こんなに長い月日が経ってしまっただけだ。

パン屋に並ぶ亜紀を見た時、全然変わっていないその姿に遥は思わず微笑んだ。

後ろに並べば、昔はなかった身長差が嬉しかった。

話してみると無邪気な彼女の態度が愛おしかった。

そして、胸が大きく高鳴った……

「久しぶりに会ったのに、全く思い出さないなんて薄情な奴。」

遥は少しそんな意地悪を言って、微笑む。

「まあしょうがねーな。俺はこんなに変わったし、ちびだったけど、背も嘘みたいに伸びたから」

私は言葉が出なかった。

喜び？ 懐かしさ？ それとも感動？ 小さかった遥への愛しさ？

色んな感情が胸を駆け巡って涙が出る。

「会いに来てくれたのね……」

私は、大きくなった遥の背中に腕をまわした。

「遥、久しぶり。元気だった？」

「うん……」

「最初に言ってくれば良かったのに」

「思い出してほしかった。思い出すって、信じてたから。結局最後

俺が言う形になったけど」

そう言って、笑い合った。

空港へ向かう時間、時間を惜しむようにたくさんの話をした。

時間は全く足りなかったが幸せな気持ちで、空港口ビーで彼を見送った。

「じゃあまた連絡するから」

「うん、待ってる！」

私がそう言つと、遥は嬉しそうに微笑んだ。

背丈とか、言葉遣いとか。いろいろ変っていたけど変わらないこの笑顔。

天使のような笑顔。

昔も今も、この表情にはきゅんとしてしまう。

彼を見るたび心に浮かぶこの気持ちを何と呼ぼう？

それが恋だと知るのは、遥が3回目の日本に来て、私たちが付き合いはじめる、まだ先の話。

（後書き）

評価、感想、もし時間がありましたらぜひぜひお願いします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4826s/>

夕日に天使の笑顔

2011年10月8日23時27分発行